

東洋大学史ブックレット 8

井上円了の世界旅行

— 旅する創立者 海外編 —

渡辺 章悟



東洋大学

東洋大学史ブックレット 8

井上円了の世界旅行
— 旅する創立者 海外編 —

渡辺 章悟

目次	
はじめに	1
一 明治の開花期という背景	2
二 岩倉使節団とその時代的背景	8
三 田了の三回の長期旅行とその意義	17

はじめに

井上田了は明治時代に三回に亘る大きな海外を旅しています。本稿はこの海外旅行について、田了の生きた時代、社会背景に基づきながら、その旅の目的と成果、影響などについて、それぞれの旅行記録などを参照しながら、未知なる世界を「旅する創立者」の姿を描こうと思います。

一 明治の開花期という背景

井上円了は安政五年（一八五八）二月四日（新暦三月一八日）に生まれました。この年六月には、江戸幕府とアメリカとの間で日米修好通商条約が締結され、わが国は鎖国から開国へ舵を切ることになります。その後、幕末の慶応、そして明治、大正時代と続く近代の激動期を、円了はまさに駆け抜けたのでした。

その中で、円了の人生を決定づけたのは、明治という新たな政治体制の確立でした。この時代は、押し寄せる欧米列強と対峙するために、日本が近代化に向かって急速に突き進みながら、自国のアイデンティティを確立することを迫られた時代でも

あります。この時代を近代化という視点から区分すると、次の三期に分けられるでしょう。

◆明治期の近代化と時代区分

〈富国強兵・殖産興業〉

(1) 初期（初期～一〇年代）― 文明開化と欧化主義

大教宣布・廃藩置県・学制発布・帝国大学令

(2) 中期（一〇年代末～）― 憲法発布（明治三年、一八八九二）

教育勅語（明治三年、一八九〇・一〇）

第一回帝国議会（明治三年、一八九〇・一一）

(3) 後期（二〇年代末～）― 日清戦争（明治二七・二八年、一八九四―九五）

日露戦争（明治二七・二八年、一九〇四―〇五）

……産業社会の急速な発展、独占資本主義の時代

明治新政府は、富国強兵・殖産興業という二つのスローガンを提唱します。江戸時代の鎖国体制から開国したわが国を欧米列強に対抗できる国にするため、地租改正や秩禄処分で税制改革を行い、同時に国内産業を育成して積極的に産業を興し、急激な資本主義化に邁進したのです。そして、経済基盤を整備しながら徴兵制や軍制改革をすすめ、植民地化されてゆくアジア諸国を垣間見ながら、欧米に対抗すべく軍事力を一挙に高める政策を遂行しようとしたわけです。

まずこの展開を年代区分順に見ると、明治初期は主にヨーロッパの文化を受容し、模倣する文明開化と欧化主義の時代です。しかし、それは同時に自国の体制を早急に確立してゆくことでもありました。それが、次に述べる幾つかの政策に見られます。

明治三年（一八七〇）大教宣布

大教宣布は明治新政府による宗教統制政策で、国学者平田篤胤をリーダーとする復古神道の主張によって祭政一致をめざし、神道信仰を強制しました。まず、明治二年（一八六九）に神祇官に宣教使を置き、翌年に大教宣布の詔書を発布、天皇の神格化と国民の教化をはかりました。さらに明治六年（一八七三）には宗教統制政策の推進を試み、その政策を担う教導職を育成するため、東京に大教院を開設し、各府県には中教院を置いて、管内の小教院を統括させました。しかし、この政策は仏教側の強い反対で早くも同年に廃止されます。

明治四年（一八七二）廃藩置県

廃藩置県は明治新政府が江戸時代の幕藩体制に見られる封建制を廃絶するために断行した政策です。明治になって版籍奉還後も封建制の実質は存続したので、木戸孝

允、大久保利通らの提唱で、残っていた二六一の藩を廃止して府県制を施行し、中央集権の政治体制を確立しようとしたものです。

明治五年（一八七二）学制発布

明治政府が採用したフランスの学制にならない、全国を小学校から大学校まで一貫した学区制度によって区分し、近代的教育体系の確立を目指したもので、これによって国民の教育の機会均等、義務教育制度の確立をなそうとしました。しかし、経済的負担による農民一揆などが起こり、明治二年（一八七九）の教育令によって改廃されます。また、明治一九年（一八八六）には帝国大学令を公布し、「国家の必要に応ずる學術技芸の教授・研究」という国家主義的な教育目的を明確にし、それまでただ一つの大学であった東京大学を帝国大学と改称しました。

以上のように近代国家形成に向けての明治政府の取り組みは、民衆の反発を招きながらも次第に形を整えていきますが、より明確に自国の独自性を示す政治体制の確立は、明治一〇年代末からの中期以降になって見られます。

まず、明治二二年（一八八九）二月には大日本帝国憲法が發布され、明治二三年（一八九〇）一〇月に教育勅語が發布、明治二三年（一八九〇）一月には第一回帝国議会開設というように、国家の根幹となる政治体制が次々と制定されるようになります。

またこの時代は、明治初期の文明開化や欧化政策の反動もあって、自国の伝統や文化を尊重し、国家体制の形成に反映させようという考え方も強くなり、さまざまに試みも始まりました。井上円了によって明治二〇年九月に哲学館が開設されるのも、まさにこのような新たな時代を創設する機運の中にあつたわけです。

次に明治二〇年代末以降に配当される第三期は、産業社会の急速な発展と、独占資本主義が進んだ時代です。その結果、日清戦争（明治二七、二八年、一八九四、九五）、日露戦争（明治三七、三八年、一九〇四、〇五）という二つの戦争に突入していきます。日本は二つ

の戦争を経験して、アジアの中で強国となりますが、欧米との競争も激化し、さらなる戦争に進んでゆくことにもなります。

以上のように明治の時代を三区分してその時代的特性を考えてきましたが、井上円了の活躍した時代は明治中期以降になります。しかし、それに先駆けて、明治政府が欧米に送った岩倉使節団が円了に与えた影響は計り知れないものがあります。

二 岩倉使節団とその時代的背景

明治初期は文明開化と欧化主義に代表されるように、先進国としての欧米の文化や政治体制に学び、模倣し、それをわが国の発展に活かそうとした時代です。

またこの時期には、海外から多数の外国人技術者を雇いましたが、同時に岩倉具視を代表とする使節団を欧米列強に派遣し、諸国の社会体制をつぶさに見聞させたのです。実はこの岩倉使節団は、アメリカのオランダ改革派教会の宣教師・フルベッキ(G. H. Voth)によって提案されたものでした。

フルベッキは安政六年(一八五九)長崎を訪れ、後の明治政府の高官となる多くの人材を育てましたが、この時の門下生に、大隈重信・伊藤博文・大久保利通などがいました。明治二年(一八六九)、フルベッキは大隈重信に対して欧米への使節団派遣を提案しますが、これが後の岩倉使節団の原案となったのです。この意見書は、「ブリーフ・スケッチ」と呼ばれ、アメリカのニュージャージー州ニューブルンスヴィック改革教会ガードナー・A・セイジ図書館に所蔵されています。この使節団は明治政府の初めての派遣使節団であって、多数の随行員を伴っていましたが、その目的は、主に次の三つに纏められます。

岩倉使節団の目的と使命

- ① 新政府の外交の開始
- ② 不平等条約の改正
- ③ 新政府の国政方針立案

最初の新政府の外交の開始とは、いわば交渉相手国への挨拶回りであり、外交の儀礼に則ったものでした。明治新政府が外交交渉をするためには必要欠くべからざるものだったはずです。

次の不平等条約の改正は明治政府にとって大きな課題でした。当時外国人には江戸時代に結んだ治外法権・最恵国待遇が認められ、日本には「関税の自主権」がありませんでした。したがって、その不平等条約の改正は新政府の最大の政治・外交問題だったのです。そして、その改正期限が明治五年（一八七二）にやって来るために、明

治政府は下交渉する必要があったのです。

最後の「新政府の国政方針の立案」とは、新政府の首脳が欧米の文物を直接見聞することで、国政の方針に役立てようとするものでした。このように使節団の使命は、幕末に締結された諸外国との不平等条約の改正にあったのですが、同時に、「殖産興業」「富国強兵」という明治新政府の国策の基礎となるべき社会・経済システムの調査と情報収集にあったことも重要な点です。

岩倉使節団の行程

岩倉使節団は、明治四年（一八七二）一二月二三日から、明治六年（一八七三）九月一日、実に二〇カ月六三二日間にかけて欧米一七カ国を視察しました。その経路は横浜（明治四年、一八七二年二月三日）→アメリカ・サンフランシスコ、ワシントン（条約交渉）→イギリス・ロンドン→パリ→ベルギー・ブリュッセル→オランダ・ハーグ→ドイ

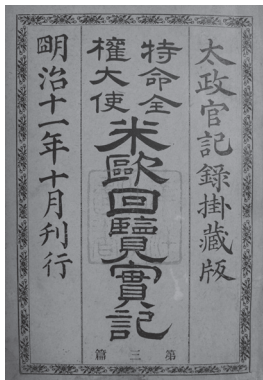
の中には、使節団員として理事官・山田顕義（陸軍少将、日本法律学校で後の日本大学創始者）、一等書記官・福地源一郎（東京日々新聞社長、衆議院議員）、留学生としては団琢磨（三井合名会社社長）や、後に民権思想のリーダーとなる中江篤助（兆民、東京外国語学校長）、ルーズベルト大統領の学友となって日露講和に貢献する金子堅太郎（農商務・司法各大臣）がいた他、後に留学生に加わった井上毅（大日本帝国憲法及び皇室典範・教育勅語等の起草、枢密院顧問官、文部大臣）、新島七五三しめ太（襄、三等書記官、同志社設立）などもいました。

また、留学生には北海道開拓使黒田清隆推薦の五人の若い女性がいたことも知られています。後に津田塾大学を創設する津田梅、会津藩家老の娘で帰国後は日赤篤志看護婦人会を創設した山川捨松、東京女子師範学校教授となった永井繁などが含まれていました。彼女たちの活躍も忘れることはできません。

以上のように、明治初頭に明治維新の立役者たちが海外の事情を具に学ぶため、こぞって欧米に出かけたという岩倉使節団は、長い間の鎖国体制から脱却して海外に目

を向けるようになった我が国にとって、画期的な出来事でした。この使節団は帰国後、見聞した欧米各国の状況を、新しい国家体制の骨組みを作るために社会の様々な分野で活躍し、明治以降のわが国に大きな役割を果たしてゆくことになりました。

なお、この岩倉使節団の記録は、太政官少書記官として随行した久米邦武によって編纂され、明治十一年（一八七八）に『米欧回覧実記』として刊行されました。そして、田了の世界旅行はそれから一〇年後に行われることとなります。



【米欧回覧実記】

i 文明開化とは、江戸時代の古い文明を野蛮未開と否定し、怒濤のように入ってくる西洋の文物を摂取することが社会進歩の道であるとするもので、その代表が欧化主義と言えます。欧化主義は、明治一〇年代、ヨーロッパ文化の移植を目的とした外交政策および社会風潮をいいますが、特に外務卿井上馨の欧化政策により、生

活の洋式化が叫ばれ、いわゆる鹿鳴館時代を現出したことで知られます。

井上馨は、まず失われた法権の回復を図ろうとし、明治一五年（一八八二）条約改正予議会、明治一九年（一八八六）条約改正会議を各国との間に進めましたが、その際には伊藤博文らとともに、明治一六（一八八三）の鹿鳴館を開館したことに象徴されるように、制度、文物、習俗を欧風化して、欧米諸国に日本の近代化を認めさせ、交渉の促進を図ろうとしたのです。

鹿鳴館での政府高官と外国使臣との社交、官庁をはじめ洋館建築、服装、結髪、食事、礼法など風俗の洋風化、キリスト教の奨励や言語、詩歌、小説、演劇、美術などの改良運動、はては人種改良論など極端な思想まで唱道されるようになりました。

ii 明治二七年（一八九四）陸奥宗光外相のときに、初めてイギリスとの治外法権撤廃に成功しました。また日露戦争の後、一九一一年に小村寿太郎外相のときには、関税の自主権を回復し、ようやく不平等条項の撤廃が実現されたのですが、このような長い時間をかけた外交努力が必要だったのです。

三 円了の三回の長期旅行とその意義

岩倉使節団の旅行は、その後の多くの日本人が欧米に学ぶために出かけてゆくモデルを作りました。その使節団はその規模からいってまれに見る大所帯であり、その使節団が持ち帰ったものは新しい文明、すなわち法律、経済、軍隊、社会制度、など新しい国家体制を形作る上で必要な、あらゆる分野における新知見でした。またそれ以上に重要なのは、欧米の文化や学問などに目を開いた人材の養成という意味で最も効果があったのです。

この使節団のあり方は、大なり小なり、その後続く日本の使節団のモデルケース

になったことは明らかです。それは井上円了が行った三度に亘る大旅行についても言えることです。特に最初の旅行はそのコースから見ても岩倉使節団の跡をたどるよう
に巡航しています。

井上円了の三度に渡る世界旅行については、それぞれについて三点の報告、乃至は
旅行記が残されています。これら三点は緊密で、体系的な記述になってはいませんが、「なんでも見てみる」という精神で、異文化を理解し、吸収しようとする旺盛な
好奇心が窺えます。確かにそれら三回の旅行はそれぞれ目的も違ってはいますが、その
「先進諸国に学ぼう」という姿勢は共通しています。次には三回の旅行について、そ
の時期、目的、旅行記の順に纏めておきます。

・明治二十一年（一八八八）六月九日～明治二十二年（一八八九）六月二十八日 〈約一年〉
欧米を中心に宗教事情等を視察。

『欧米各国政教日記』（哲学書院、明治三二）

・明治三五年（一九〇二）十一月一日～明治三六年（一九〇三）七月二十七日 〈約八ヶ
月〉
中国、インド、ロシアと欧米を具に視察、仏蹟巡拝を行う。

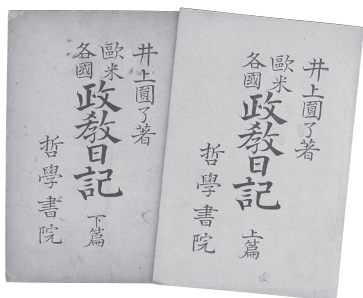
『西航日録』（鶏聲堂、明治三三）

・明治四四年（一九一〇）四月一日～明治四五年（一九一〇）一月二日 〈約一〇ヶ月〉
オーストラリア、アフリカ、北欧、南アメリカなど、おもに南半球を視察。

『南半球五万哩』（丙午出版社、明治四五）

第一回の視察

まず一回目の旅行は、明治二十一年六月九日～二十二年六月二十八日、約一年間にわたって行われました。その記録は『欧米各国政教日記』（哲学書院、明治三二）に残されています。



『欧米各国 政教日記』

本書によれば、視察の目的は「哲学的ノ視察ヲ欧米各国ノ政治宗教風俗教育ノ上ニ施サン」（第二一節）とあるように、ヨーロッパとアメリカの政治・宗教・風俗・教育、すなわち社会全般に及ぶものです。さらに言えば、本書の方針は、「懷中日記」から「日月地名を除き去り、専ら宗教風俗に關したる種目のみを取り出して」編纂した事項本位の冊子と述べるように、日記的な性格を取り除き、より純粹

に西洋の宗教事情の視察報告書としてまとめようと思図したもののなのです。

円了は元々このような記録を残そうとしていたわけではありませんが、旅行先から刻々と書き送った情報を、日本にいて世界の最新の情報を期待していた支援者に対し、「五六週間に一度」の最新の記録を期待する彼らの要望に応えるという形で報告を続けたものです。その結果、かなりの分量にまとめられたもので、当時最新のニュースを盛り込んだ旅行報告書であったと言えるでしょう。その内容は次のような一〇項目、大小二九一節からなっています。

- ① 周遊の目的および太平洋紀行の部（第一節～）
- ② 米国ならびに大西洋紀行の部（第一七節～）
- ③ 英国地方紀行の部（第五一節～）
- ④ 英国ロンドン紀行の部（第一〇三節～）

- ⑤ スコットランド紀行の部（付アイルランド）（第一四二節）
- ⑥ フランス紀行の部（付スイス、スペインおよびポルトガル）（第一五〇節）
- ⑦ イタリア紀行の部（付ギリシャおよびトルコ）（第一八〇節）
- ⑧ オーストリア紀行の部（付ロシア）（第二〇九節）
- ⑨ ドイツ紀行の部（付スウェーデン、デンマーク、オランダ、ベルギー）（第三八節）
- ⑩ インド洋帰りの部（第二六四節）

これに見られるように、太平洋を渡り、アメリカ大陸を横断し、大西洋を渡り、イギリス、フランス、スイス、スペイン、ポルトガル、イタリア、ギリシャ、オーストリア、ロシア、ドイツ、北欧のスウェーデン、デンマーク、オランダ、ベルギーの順で、ヨーロッパ諸国を歴訪し、欧米の宗教の現状、教会制度などをつぶさに報告しています。その内容はかなり具体的で、各地域の教会の組織や規模、信者の数、献金の

額などをあげていて、まるでルポルタージュのような内容となっています。そのような調査を通じて、キリスト教が民衆の中に根ざしている、それぞれ多様なあり方でありながらも、生活の基盤になっていること、キリスト教が独自の宗教教育を施していること、などが大きな関心を引いたようです。

円了は本書を書くにあたり、自らを「政教子」と名乗っていますが、この政教とは「哲学」のことであるといえます。しかも、「理論哲学」に対する「実際哲学」のことで、内容上は「宗教学」と「教育学」にあたると述べています。この二つの学問体系こそが、国の根幹をなす「無形上の文明」を研究対象とするもので、最も重要な領域であるとも述べています。そして実際にこの領域について社会に働きかけることが、円了の哲学教育、哲学館の開設という行為につながっていたことは明らかです。本書のタイトル『欧米各国政教日記』は、この政教を学び取るうとした円了の姿勢を明示するものです。

帰国後に発表された成果と指針

円了は帰国直後の明治三二年七月に「哲学館改良の目的に關しての意見」、さらに同年八月に「哲学館将来の目的」というように、現況の日本の批判に基づきながら、哲学館の将来像を発表しました。その主な内容は、次のようなものです。

一 欧米各国では、その国で発達した固有の学問・芸術（言語学・文章学・歴史学・宗教学等）が盛んに講義研究されている。一国の独立にはその国に固有の学問の発達が不可欠である。

二 西洋諸国ではその国固有の学問・芸術を研究するほかに、東洋学の研究も盛んに行われている。ドイツやフランスの東洋学校には「日本学」の学科さえある。しかし日本ではその分野の学問が確立していないことから、早急に東洋学研究をすすめる必要がある。

三 欧米各国の指導者の教育法は、日本のように学力のみに重点が置かれているも

のではない。たとえばイギリスのジェントルマン（階層）を育成する教育に見られるように、人物の品性、特性を重視した教育を施すべきである。

以上の問題を掲げつつ、今後は日本固有の学問を基本にし、これを助けるのに西洋諸学の体系を用いる、それが「日本国の独立、日本人の独立、日本学の独立」を目的とした「日本主義の大学」につながるという構想を発表したのです。つまり、哲学館の教育の中にこの方針を活かそうとしたものです。

第二回の視察

第二回目の旅行は、明治三五年一月一六日から明治三六年七月二七日にかけての約八ヶ月の旅でした。第一回目の外遊から一四年後のことです。この旅は第一回目の巡航コースとは逆に、横浜から出港し、西廻りで中国、インドなどヨーロッパに渡り、アメリカを経由して太平洋を渡って横浜港に帰着という西周りのコースです。



『西航日録』

すが、その内容のトピックは、次のようになります。

この旅では各地で軌道に乗った哲学館から羽ばたき、あるいは留学し、各国に滞在している教え子と再会している様子を伝えていて、円了の教育活動が次第に広がっているようすが実感できます。この旅行は『西航日録』（鷄声堂、明治三三）によって報告されています。

- | | |
|----------------|----------------------|
| ① 再び西航の途へ | ② シャンハイ上陸 |
| ③ 日本人とシナ人 | ④ シャンハイ所感 |
| ⑤ ホンコン上陸、旧知に会う | ⑥ シンガポールに着す |
| ⑦ ペナン遊覧 | ⑧ カルカッタで大宮孝潤・河口慧海に会す |

- | | |
|--------------------|-------------------------|
| ⑨ カルカッタ市内見聞 | ⑩ ダージリン着 |
| ⑪ 康有為を訪う | ⑫ ヒマラヤ見物 |
| ⑬ プダガヤからベナレスへ | ⑭ ボンベイに着し、新年を迎える |
| ⑮ インドの宗教所感 | ⑯ ボンベイを発し、スエズに向かう |
| ⑰ 地中海に入る | ⑱ マルセイユからジブラルタル海峡を抜け北走す |
| ⑲ ロンドン着、二週間余り滞在す | ⑳ 哲学館教員免許取り消しの報あり |
| ⑳ バルレー村に転住す | ㉑ アイルランドに向かう |
| ㉒ ベルファストの実況 | ㉓ ロンドンデリーに遊ぶ |
| ㉔ ジャイアント・コースウエーに遊ぶ | ㉕ ダブリンの実況 |
| ㉖ アイルランドの風俗・人情 | ㉗ ダブリンからウエールズ・バンガー村へ |
| ㉘ ヘースティングズに遊ぶ | ㉙ ワーテルローの古戦場を見る |



インド・カルカッタにて（井上円了、
河口慧海、大宮孝潤）
明治35年12月18日撮影

この中で最も力を込めて描かれているのは、河口慧海とインドで再会し、ともに仏蹟の巡拝をした記録です。円了は上海、ホンコン、ペナンを経由してインドのコルカタ（＝カルカッタ）に留学中だった大宮孝潤の家で、初期の教え子であった河口慧海に出会います。

大宮は哲学館出身で天台宗の留学僧でしたが、長年インドに滞在して研究を続けていましたが、まさにその時期のことです。帰国後の大宮は仏教学の研究者として著作を上梓し、あるいは哲学館でサンスクリット語を講じるなど、宗門の碩学として知られています。

一方、河口慧海は在家からおうちばく黄檗宗

③1 アントワープ港に遊ぶ

③3 ベルリンへ

③5 カントの墓所

③7 サンクト・ペテルブルグ見学

③9 パリに着す

④1 スコットランド高地

④3 ニュートン、ダーウィン墓所

③2 アムステルダム、ハーグを見てブリュッセルに帰る

③4 ルターの遺跡を見る

③6 ロシアに向かう

③8 ベルリン、フランクフルトそしてスイスへ

④0 スコットランドへ

④2 温泉地バース

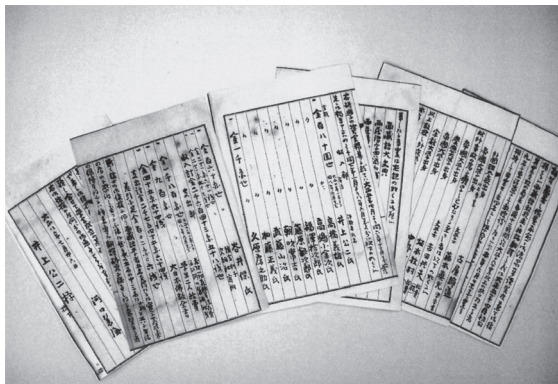
④4 リバプールよりニューヨークに向かう

④5 ハーバード大学学位授与式に列席

④7 シアトルから帰国の途へ

④6 シアトルへ向かう

④8 欧米巡見所感



慧海が財界人に当てた勸進書（東洋大学図書館蔵）

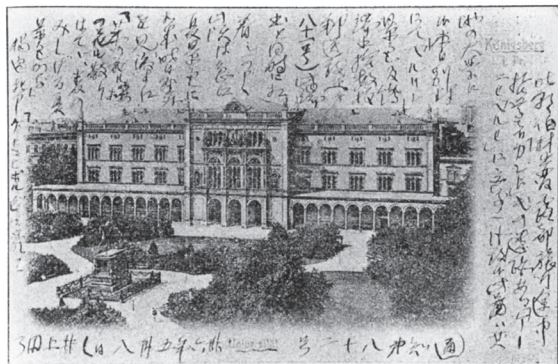
した。しかし、途中で重症の「チスター熱」にかかってダージンにて療養中でした。そこで、師である円了が訪れることを知って、コルカタに出てきたのです。

その後、慧海は二週間に亘ってインド滞在中の円了の世話をし、ダージン、タイガーヒル、ヴァーラーナスイー（ワナレス）からムンバイまで付き沿って案内しました。その間、ブッダが悟りを開いた聖地であるブダガヤで、後に浄土真宗本願寺派門主となる大谷光瑞とその随行者である同郷の藤井宣正らと偶然に出会ったことは、慧海の『西藏旅行

の僧となり、慶応義塾から哲学館に転じ、仏教を学んだ篤信家ですが、哲学館卒業後には宇治の黄檗山萬福寺で一切経を読むうち、さらに大乘仏教の深源をとどめるチベットに赴くことを決意します。そうして、入念な準備の後、仏典を求めて当時鎖国中だったチベットに日本人として初めて潜入し、チベット・ラサの僧院で仏教を学んだ人物です。慧海は帰国後、グライラマから譲り受けた大量のチベット語仏典（大蔵経をわが国に将来し、本格的にチベット仏教をわが国に紹介した人物です。

帰国後は東京大学をはじめ、幾つかの大学でチベット語を教授しましたが、哲学館でも若い俊才たちを集め、自ら篤志家に寄付を願って奨学資金を集めて、彼ら給付生にチベット語の教育を施し、仏教学を担う研究者を育てようとしたことも知られていません。（写真「慧海が財界人に当てた勸進書（東洋大学図書館蔵）」）

慧海が円了と会ったのは一九〇二年一月のコルカタですが、その前に国籍を偽ってチベットに入学していたことが露見したため、難を逃れてチベットを脱出したので



ドイツ・ケーニヒスベルクからの絵はがき

その後も円了は大陸に移動し、ベルギー、オランダ、ドイツを訪問していますが、特にドイツではプロテスタントイイズムの創始者の一人であるマルティン・ルターゆかりのウィッテンベルクとカントの郷里であるケーニヒスベルクを訪問しています。現在東洋大学では近代哲学の学匠であるカントを四聖の一人としています。が、当時はまさにヨーロッパ第一の哲学者と見なされていたのです。円了はカントの墓地と「古物博物館」を訪問し、カントの愛用品や遺物を見て、感激を新たにしています。

次いで、ロシアの都で会ったサンクトウ・ペ

旅の中で、この文部省の措置に、官僚主義への批判と大なる失望の念を吐露しています。



河合慧海著『西藏旅行記』（堺市博物館蔵）

記」にも記されています。

円了は慧海とムンバイで別れ、地中海からヨーロッパに渡り、ロンドンに至りました。ロンドンでは、学校、工場、博物館、図書館、孤児院、止宿所、孤児院など多くの社会施設を見学しています。とくに、託児所や「貧民に飲食を施す」慈善組織に関心を持ち、実際に食事を経験したようすが記録されています。

また、ロンドンでは、哲学館教員取り消しの報告を受けるのですが、これは「哲学館事件」としてわが国の教育界にとっても哲学館にとっても大事件でした。円了は

テルブルクに到着し、そこで元哲学館の講師をしていた八杉貞利に会い、様々な便宜を図ってもらっています。八杉は帰国後、東京外国語学校（東京外大）の教授となり、多くの弟子を養成したロシア文学者の草分けです。

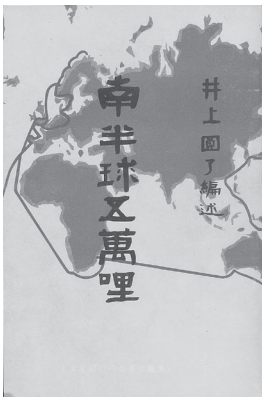
円了は再びベルリンに戻り、そこで哲学館講師の中村久四郎と再会したり、大西洋を横断してアメリカに渡り、ハーバード大学の卒業式に参列し、そこで哲学館出身の高木真一君と会ったことも誇らしく語っています。高木は私費留学生でアルバイトをしながら苦学して成績優秀な学生として無事に卒業しました。このことから、円了は高木を「日本青年学生の規範とするに足る」と讃えています。以上のように、この旅行は仏蹟や哲学の関連する場所を訪問していますが、各地で活躍する哲学館の卒業生に出会うことによって、哲学館教育の拡充を実感する旅になったはずです。

また、本書の最後に「欧米巡見所感」がありますが、ここでは日本は東洋の一強国として知られますが、欧米に比して見ると遙かに遅れていて「東洋に覇たる資格を有するものにあらず」と結論しています。その中で、自らの進取の精神にかける国民性を取り上げ、その教育向上を根本から見直すために、国民教育の必要性を力説しています。

実際に円了は帰国後、「広く同窓諸氏に告ぐ」を発表し、①哲学館大学の開設、②哲学堂の建設、③修身教会運動の設立と全国巡講についての決意を表明します。特に最後の修身教会運動は、西洋の教会に習い、修身道徳を教える場を作る必要があること、その全国組織として寺院や小学校などを活用しながら、哲学堂を総本部の役割を果たすものとして組織化しようとしたものであって、学校教育以外の民間教育・社会教育として、修身教会運動を構想したことがうかがわれます。この運動が、後（明治四五）に国民道徳普及会へと発展するのです。

第三回の視察

第三回目の海外視察は、第二回目の視察から八年後、明治四四年四月一日から明治四五年一月二二日までの約一〇ヶ月に渡る旅でした。その訪問地は、オーストラリア、南アフリカ、イギリス、北極地帯、北欧、ヨーロッパ（ドイツ・フランス・スペイン・ポルトガル）、中南米（ブラジル・ウルグアイ・アルゼンチン・チリ・ペルー・メキシコ）、ハワイであつて、今までに注目されていなかった南半球を中心にもわつた旅だつたことが重要です。ま



南半球五万哩

た、円了はこの旅行で、四回も赤道を横切り、北はノールカップ岬、南はホーン岬（マゼラン海峡）と、南北二つの極地に達するという、当時の日本人として稀な経験をしていることも注目されます。

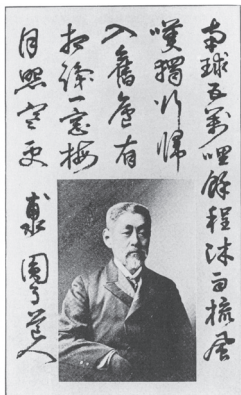
この旅の記録は『南半球五万哩』（丙午出版

社、明治四五）によって知ることが出来ます。

その目次内容は次のようになっています。

緒言

- ① 南半球往航日記（ホンコン、カントン、マニラ紀行）
 - ② 豪州紀行（第九節〜）
 - ③ 南インド洋船中日記
 - ④ 英国行日記
 - ⑤ 北極海観光日記
 - ⑥ 欧州大陸紀行
 - ⑦ 南米行大西洋横断日記
 - ⑧ 南米東部紀行
 - ⑨ 南米西部およびメキシコ紀行
 - ⑩ 太平洋帰航日記（付世界周遊再見）（第八五節〜）
- 付録〔①豪州より哲学会に寄せたる書簡、②大西洋上より哲学会に寄せたる書簡、③南アフリカ行の船中より『東洋哲学』へ寄せたる風俗談、④南アフリカ行より『新仏教』へ寄せたる船中奇談〕



円了絵はがき

また、本書の第九三節以下は第三回の旅行の纏めであって、第九四節「前後三回の足跡」は、円了の三回の海外視察が纏めて報告されています。

その内容を見ると、後半の南米の記述に新鮮なものが見られます。円了はこれまでの二

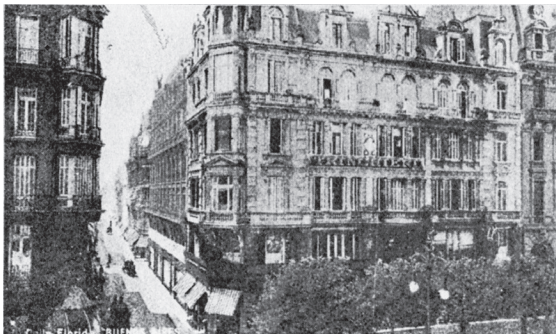
度に亘る世界旅行で、北半球の様子は見知っていたのですが、南半球については未知であって、当時の講演の聴衆からもたびたび南半球についての質問があり、これに答える必要もあったのでしよう。また、円了にはこれからは、北半球の時代は終わりを迎え、南半球の新時代へ向かうという判断があったようです。

円了が南半球で見聞きしたものは実に女子教育の状況にあるとあって良いでしょう。たとえば、メルボルン大学では一〇一三人中女学生は一六一名、シドニー大学で

は全学生一四〇〇人中女学生は三〇〇名であること、アルゼンチンのラプラタ師範学校では生徒全員が女子であり、初等教育における女性の役割に注目しています。また文科大学では学生の半分が女子であるし、チリのサンチャゴ文科大学でも在学生二〇〇名中三分の二が女子であることなど、細かい数字をあげて報告しています。

さらに、女性の社会進出に注目し、チリでは電車の車掌の大半は女性であって、駅の店員も女性が多く見られることを感心の念をもって記しています。

円了は明治三九年には哲学館大学長、京北中学



アルゼンチン国首府ブエノスアイレスからの絵はがき



チリ国婦人

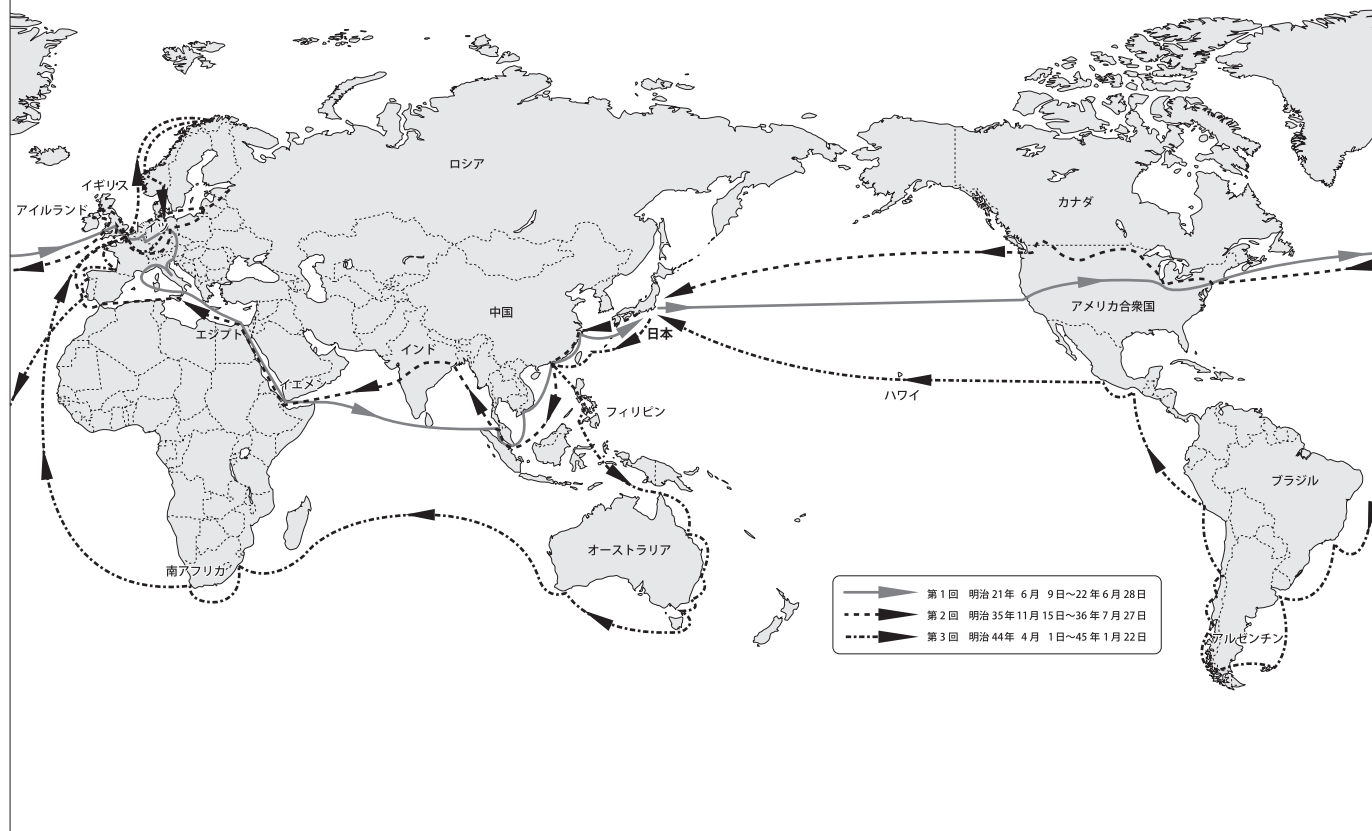
校長を辞職し、名誉学校長になっており、実際の大学運営にはかかわっていませんが、帰国の五年後の大正五年（一九一六）に東洋大学が他大学に先駆けて女子学生を受け入れたことは、この円了の見聞にもとづくことは想像に難くありません。

この三回目の世界旅行は、『南半球五万哩』という紀行文の書名にもあるように、新世界のオーストラリアをはじめとする新興国ですが、逆に女性の社会進出に見られるような新たな社会の規範の創出にいち早く着目した円了の柔軟な思考が見て取れます。世界人としての広範な視野を持った円了の面目がうかがわれる点でもあります。こうしてこれら三回の旅行によって東洋大学の礎が固められていったのですが、この旅行の概要をまとめると次のようになります。

井上円了の海外旅行

	目的	出発日(期間)	年齢	旅行先(訪問順)
1	欧米の盛況状況・東洋学の研究状況の視察	明治21年 6月9日 (1年間)	30歳	アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリア、エジプト、イエメン
2	インドの仏蹟参拝、欧米の大学教育・経営、社会教育の視察	明治35年 11月15日 (8カ月)	44歳	インド、イギリス、ウエルズ、スコットランド、アイルランド、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、スイス、アメリカ、カナダ
3	オーストラリア・アメリカ大陸等の視察旅行	明治44年 4月1日 (9カ月)	53歳	オーストラリア、イギリス、ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、ドイツ、スイス、フランス、スペイン、ポルトガル、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、チリ、ペルー、メキシコ

井上円了の 海外視察経路



〈参考文献〉

- 『井上円了選集』第二三卷、東洋大学井上円了記念学術センター編
『井上円了・世界旅行記』東洋大学井上円了記念学術センター編、発行所（株）柏書房
『岩倉使節団 米欧回覧実記』田中彰著、岩波書店
『欧米各国政教日記』（上・下）井上円了著、哲学書院

東洋大学史ブックレット 8

井上円了の世界旅行

—旅する創立者 海外編—

二〇一四年三月二〇日 発行

編集

東洋大学井上円了記念学術センター

著者

渡辺章悟（東洋大学文学部教授）

発行

学校法人東洋大学

東京都文京区白山五―二八―二〇 〒一〇二―八六〇六

印刷所

株式会社フクイン

東洋大学